

# 影あるまじき

西尾維新×西村キヌが「いま、そしてかつて少年と少女だった」  
きみにむけて放つ、「魔女っ子」ものの超・最前線！  
魔法は、もつはじまっている！

……なぜ、  
魔法はあるの？

……なぜ、  
変身するの？

……なぜ、  
大人になるの？

……なぜ、  
少女なの？



# 新本格魔法少女りすか 光あれ。

NIJIKOJIN

西尾維新

Illustration / 西村キヌ(CAPCOM)

●本文使用書体 / 游明朝体 02R OTF R

「影谷蛇之——犯人が、あの人のな」

水倉りすかは乾いた食べ物を好まない。これは本人の好みというよりは体質の問題であるのだが（何でも談によれば、りすかは水分だけで一年は生きていけるが、水分なしでは二日で死ぬらしい）、とにかく乾物系の菓子など目にするだけで顔をしかめるし、この間ほくの家でせんべいを出したときなど、霧吹きで湿らせてから食べたほどだ（湿ったせんべいはなかなかおいしいと言っていた）。水羊羹などはおいしそうにもぐもぐと食べるし、西瓜や葡萄などのフルーツ類がお気に入り模様だ。本日、水倉りすか直属の従僕、執事のチェンバリンが用意してくれたばかりに對する三時のおやつは、そういうわけでバナナのムースだった。りすかは並んで用意されたコーヒーにしこたま砂糖を放り込んで、こくりとそれを口にしてから「影谷蛇之」と、もう一度繰り返した。

「それはいくらなんでも大袈裟に言ってるんだろ？……そういや、そういうええばだけど、りすかの親父さんも、結構色んな呼び名があったよね。『ニヤラトテツブ』だの、何だの。あの人は十個くらい持つてるわけ？」

「六百六十五個の称号保持者が、お父さんなの」

「だがしかし、えらく中途半端な感があるね」

「本当は六百六十六だったけれど、その内一つを、わたしが受け継いだから。六百六十五なのは、だからなの」

「——受け継いだって……『赤き時の魔女』だろ？」

『魔女』って、親父さん、男じゃないのか？」

「お父さんほど高次の存在になれば、もう性別なんて関係なくなっちゃうから」

りすかは照れ笑いのようにそう言った。聞けば聞くほど、途方もない親父さんである。

「……ま、親父さんの話はひとまずいいとして……しかし、五つの称号ね——」ぼくはりすかが口にした五つ

た。

「ナガサキじゃ結構——かなり、とっても、通った名前の魔法使いなの。知らない人の方が珍しいのが、魔道市に住んでる人じゃないのかな。『影の王国』、『豚歌い』、『鷲豚の輪廻』、『赤豚紳士』、『悪意の天才』——五つの称号を持つ怪人、レッドジャケットの男。『魔法の王国』では称号の数イコール権威、魔力の大きさを示すってことは、説明を済ましたのが最初の頃だよな？ わたしが持つてる称号は『赤き時の魔女』の一つだけだから——それだけでも、凄さが分かるうってものなの、影谷蛇之なの。そもそもわたしの称号って、運命干渉系の魔法使いだから、もらえてるのがなんとなくみたくないものだし」

「ふうん……称号、ね。それって確か、一つ持つてるだけでも、もう梓外存在なんだろう？ そんな称号を五つ、か……そのまんま単純に考えると、りすかの五倍ってことになるけど」

「話じゃないのが五倍どころなの。五乗より凄いの」

言葉は胸内で反芻する。『影の王国』、『豚歌い』、『鷲豚の輪廻』、『赤豚紳士』、『悪意の天才』。やけに豚関連が多いけれど、なんだろう、そっちじゃ豚は神聖な生き物だったりするのかい？ てっきりそういうのは、黒猫やら鴉やらのジャンルだと思ってたけど。それとか、あとはトカゲとか蝙蝠とか、かな」

「ううん。豚は豚なの。食べ物なの」

「食べ物か」

「おいしいの」

「おいしいか」

「でも」りすかはムースを頬張って、咀嚼しながら喋る。少し行儀が悪い。「これは、気付いたのが最近なのはわたしもなんだけれど——県外と長崎県とじゃ、捉え方が違うみたいなのがある言葉なの」

「うん？」

「県内じゃ人間に対して『豚』っていうのは尊称だから。県外じゃ違うでしょ？」

「うーん……まあ、あまりいい印象の言葉ではないな」

個人的な意見だが、馬鹿だとか阿呆だとかよりも、言われる側としてはきつい言葉であると思う。主に下種野郎を指すときや、太った人を罵倒するときを使う言葉だが、……しかし考えてみれば下種野郎と肥満の間には何の関連もないのだから、一緒くたにするのは無体な話である。ま、どちらにしても、心地よくないスラングであることに間違いはない。そもそも人間が育てなきゃそんなに太る動物でもないし、行動原理も動物の中では中の上つてとこだらうに……。しかし、だからといって、長崎県じゃ尊称なのかい？ 極端な話だな」

「尊称というのは、まあ、大仰だったの……つまり、ちょっとした褒め言葉なの」

「褒め言葉、ねえ」

「主に男の人の。こっちにあわせて言えば、意味になるのは、『格好いい』とか『スタイリッシュ』とかだと思いの」

「ふうん——それは、そのニュアンスからすると、単なる言語のずれてことじゃないね。むしろ同じ存在に対する」とは思えない。子供の飲むものではない。「それに、ぼくはりすかと違つて湿っぽいのは好みじゃないから、ムースもりすかが食べていいよ。……で、本題に戻つて……その影谷——蛇之？ そういう名前の『影の王国』が、今回の件の犯人だったか？ なんでそこまで自信をもつて断言できる？ 有名人だつて話だけれど、普通そんな有名人が、自分の人生にかかわつてくるとは思わなれないものじゃないのか？ それともりすかにとつてそれは珍しいことじゃないっていうのかい？」

「ん……珍しいといえば珍しいんだけど——ただ、特徴を聞く限り、そうとしか考えられないって話なの。やり方も、使う魔法もそうみたいだし……呪文の詠唱がなかったんでしょう？ それほどの魔力を持った存在は魔道市にだつてそうそういないし……けれど、そうなると、少し厄介なの」

「厄介というのと？」

「わたしじゃ、相手にならないってことなの」

そんな弱気なことを言うりすかは久し振りだつたの

する認識のずれて感じた」

「そ」りすかは頷く。「長崎県では、その手の男の人がもててなの」

「文化の違いか……昔の日本で瓜実顔が美人と言われていた……みたいな、ものかな」ぼくはとりあえず、分かりやすい形で理解しておくことにしておいた。と、そこで思いついたことをりすかに訊いておく。「じゃ、りすかもその手の男が好きなのかい？」

「ん？ ん……わたしは別に、そんなことはないの。そんなにミーハーじゃないのが、わたしだもん」言いながら、りすかはムースの載つた皿をフォークで指し示した。「ほら、キズタカもはやく食べるの」

「ああ……」

「砂糖をもつと入れた方がいいのが、コーヒーなの。ほらほら、遠慮しないで」

「……遠慮する」ぼくはブラックのままのコーヒーを、いい感じに冷めたところで、一気に半分ほど飲み干した。苦い。チェンバリンには悪いが、どうしてもおいし

で、ぼくはわずか以上に面食らつた。しかし冗談で言っている風ではなさそうだ。それはつまり、とりもなおさず、影谷という男、その魔法使いは——言いつぶりを聞く限り、ただの人間から『魔法』使いに転じた方ではなく、生まれついで『魔法使い』の側だろう——りすかよりも、遥かに大きな魔力を有しているということを示しているのか。

「おい、りすか——それって……」

「あ、ちよつと待つ」りすかは手を伸ばして、そばにあったテレビのリモコンをつかんだ。「そろそろ大相撲の始まつてる時間なの」

「……………」

「九州場所、早く来ないかなー」

うつとりした風につぶやきながら、テレビの画面に集中し始めたりすかに、なんだかあまり知りたくもなかった新たな一面を発見させられながら、ぼくは一つ、嘆息した。ただの角技好きに見えないこともないが、先の話聞いてしまえば、薄笑いを浮かべながら土俵上の力士